

# 風土

神蔵器名誉主宰追悼号





故神藏器先生

## 鯉揚げや追ひ打ちに櫂水叩く

(句集『竹取』より昭和四十一年作)

この句は「横手鯉揚げ十句」の中のひとつです。風土色を求めている吟行と思われます。「鯉揚げ」は池普請の時に行われます。冬の渇水期に池底に溜まった泥をあげ、ゴミを除いて春の農作業に備えます。その時に農家の蛋白源として鯉や鮒を揚げるのです。

水がだんだんと減り鯉が犇めき騒ぐのを、さらに櫂で水を叩き追い込むのです。修羅場が活写されています。

## 仲見世の裏行く癖も十二月

(句集『竹取』より昭和四十一年作)

これは浅草寺の「仲見世」でしょう。十二月半ばになると年の市が始まり、注連飾りや新年用の盆栽、破魔弓、羽子板、雑貨などを買い求める客で賑やかになります。さて「裏行く癖も」とあるで、普段から裏を行き来していることが解ります。「仲見世」を知り尽くしておればこそとも、表の混雑を避けての「裏行く」とも読め、江戸っ子桂郎師ならではの措辞です。

## 綿虫にいのちの重さありて泛く

(句集『木守』より昭和六十二年作)

「綿虫」は晩秋から初冬にかけて、空中を青白く光りながらゆるやかに浮遊します。そのような微細な羽虫に対し「いのちの重さ」とことばを置いていきます。「いのちの重さ」があるから「泛く」、すなわち生きているのだと。ここに器師の、対象に真摯に向き合い、その命を受け止める「いのち二つ」が体現されています。

## 目に消ゆるまで近づきて梅の花

(句集『木守』より昭和六十二年作)

この句は、芝不器男の「向日葵の蕊を見るととき海消えし」を想い起させます。いずれも近過ぎて対象が視界から消える現象を詠んでいます。ただし不器男の句は外側の海が消えたのに対し、器師の句は内側の「梅の花」が消えています。消えるというより、「梅の花」の輪郭が捉えられなくなったのです。咲き初めの「梅の花」の香りもろとも、その命に近づこうとして得られた作品なのです。ここにも「いのち二つ」が現出しています。

鉦 叩  
南 うみを

鳶横にななめに滑り野分だつ

蟋蟀に青邨の貌誓子の眼

根の国の叫びの色のまんじゆさげ

「徳と会」を終えて 二句

師の墓に青空をこそ秋彼岸

桂郎と器のこゑの鉦叩

まんじゆさげちぢれし鬚となり果てぬ  
めつむりて聴かむ棚田の落し水  
燕去ぬ朽ち船の錆盛りあがり  
満月へぬた場の猪の泥しぶき  
草の実を袴につけて在祭  
神官のぬつと躑躅の狂咲き  
里神楽おかめ佳境の腰を振る

「俳句のあるふち」十一月号掲載句を含む



# 竹間集

同人作品



命ふたつ

浅田 光代

放生会 簞に浮きて勅使道  
水底に日のありありと放生会  
沓音を待つ放生の桶並べ  
放生会桶の金魚をはらはらと  
放生会 濟みたる桶の水を切る  
放生会 徳ふ会 一句  
濃竜胆「命ふたつ」をこころして  
どこへも行かぬ先生の冬帽子

小鳥来る

柿沼 盟子

爪切つて色なき風に手をかざし  
川端に火と水の神秋澄めり  
風向きや鎧ふがごとき種なすび  
家ごとに祭提灯野分過ぐ  
爽やかや手ぶらとなりし帰り道  
小鳥来る日差しこぼす木こぼさぬ木  
恐竜の骨格標本素風過ぐ

曼珠沙華

高村 令子

積み上げし棚田の晴れや曼珠沙華  
鳶上げて秋天穿つ天守閣  
布団干す大惑星の日向借り  
風通し良き人とある花野かな  
生きるとは残されしこと彼岸花  
日に幾度過ぎゆく雨や萩の花  
夕闇を誘ふ水音そばの花

雨のあと

土井三乙

颯颯と山の風来る祭過ぎ  
洗濯に出し甚平と別れけり  
百日紅まだ明るくて雨のあと  
夏果や三日剃らねば別の貌  
眼科より内科へまはる残暑かな  
魚屋の咲かす朝顔海の紺  
盆三日その後の雨のけふる日々

虫時雨

林 いづみ

「喉遣言きるな」「延命するな」露滂沱  
秋晴れをひと日賜はる七七忌  
一葉落つ御墓の木槿大樹かな  
やすらかに眠る師に添ふ曼珠沙華  
器忌と記す手帳や虫時雨  
す子規庵二句さまじや刀身研磨の仕込杖  
秋気澄む斜めに減りし朱墨かな

霧 襖

小根 共代

阿夫利嶺に神在します霧襖  
御師の宿敷居にすべる夕野分  
愚陀仏庵通り過ぎたる子規忌かな  
日捲りの子規の一句に秋日差  
秋気満つシテの翁の袖ひらく  
竜淵に同じ構への散居村  
雁渡し主の留守や鳴立庵

野の秋

中根 美保

紅芙蓉遊行忌へ咲き惜しむなし  
秋冷や素足きよらに修行僧  
鯖雲を突つ切つてゆく光あり  
騙し絵のやうに魚ゐる秋の池  
風過ぎて傾くままや沢桔梗  
底なしの闇の色秘め吾亦紅  
秋薊力凝らして枯れんとす



# 神蔵器の五十句

## 第一句集『二代の甕』

日焼せぬ吾子を押しやる波の前  
走馬燈闇着せられて売られけり  
右肩の凝る癖あるも竹婦人  
金澱む二代の甕や西鶴忌  
煮凝りや死後にも母の誕生日

## 第二句集『有今』

身をもんで一夜に枯るる萩の丈  
年酒酌む口中に梅ひらくごと  
寒椿いつも見えぬていつも見ず  
凍瀧を山に立てかく琴のごと  
椿落つ樹下に余白のまだありて

第三句集『能ヶ谷』

田や畑や動かぬものに雪つもる  
百里来て花かたかごは秘中の秘  
下駄をはくときの男や初嵐  
鳥帰るうつらうつらと大櫂

第五句集『心後』

今生に白は紛れず冬かもめ  
太宰忌や顔を洗ひて顔忘る  
百打つて鮭打ち棒のころがれる  
刈田ごと扇びらきにすずめ揚ぐ  
いのちまた燃ゆる色なり初明り

第四句集『木守』

葉牡丹の渦の芯より眼ぬく  
目に消ゆるまで近づきて梅の花  
綿虫にいのちの重さありて泛く  
桂郎忌天より烏瓜はづす

第六句集『幻』

白牡丹そのまま月の牡丹かな  
いなびかり沁み入る妻の髪洗ふ  
ふるさとは山従へて旧の盆  
なきがらの聖樹にふれて退院す  
牡丹焚くわれを投じて了りたり

第七句集『貴椿』

初日さす大竹藪の青しぶき  
枯山へ餅搗く音のえくぼなす  
くれなゐの空のさざなみ滝ざくら  
たまきはる白のひびけり貴椿

第九句集『月の道』

いのちなり西行と佇つ青嵐  
秋風を二三步追へり見送れり  
一本の村を出て行く月の道  
放鷹会高貴な空をのこしけり  
来迎の雲を放てり朴の花

第八句集『波の花』

沸き上がる海を巻りて波の花  
涼風を村いつぱいに擲立つ  
百一年子規の留守なり蟬の穴  
山一つあたたためてゐる冬すみれ

第十句集『氷輪』

白鳥の帰りし空の日々濁り  
あをによし奈良の仏と花菜漬  
一本の櫛の芽を搔く雲の中  
亀鳴くを桂郎逝きてより聞かず  
秋風の他は置かざる机かな

第十一句集『月虹』

凍星を源流にして大河かな  
秋立つや水に手が出て足が出て  
天平の蘆を迂る雀の子  
神々に恋して深山蓮花咲く

(これまでの句集十一冊から順に数句ずつ抽出。南うみを)



# 山河集

同人作品



南うみを選

偲ぶ会

弔文に師の声あまた天高し  
其処此処に師のまなざしや天高し  
師の香り抱く遺品や酔芙蓉  
コンビニに休む神輿や鱗雲  
新調の神輿三基や秋祭

中嶋陽子

冷蔵庫開ければ夜行列車過ぐ  
障子入れて月の出汐に敏くなる  
賑はひのあと真つ暗や墓参  
月光を鱗のごとく身にまどふ  
置き去りにされたるやうな秋の暮

吉田 啓郷

秋澄むや茶筌師の聞く竹の声  
蟻螂の風に胸はる塀の上  
焙じ茶に太き茶柱秋灯

岡 尚

水澄むや遠州信楽手になじみ  
秋扇に定家の一首たをやかに

雨宮 桂子

秋蝶に一步越さるる思ひあり  
栗の実に転げる痛さありにけり  
音のなき靴踏みしむる白露かな  
秋風や指で確かむイヤリング  
おしろいの夕べそはそはしてゐたる

岡本 尚子

厄日かな船頭小屋に担ぎ棒  
鶏頭を抜けば滂沱に種こぼる  
十六夜や湖底の宮に鈴の音  
霧の夜塩とレモンとウオッカと  
夜に火花散らすふいごや曼珠沙嘩

# 風土独語／南 うみを



草根を煮る香ただよふ白露かな

赤石 梨花

「草根を煮る」とは山野で採った茜や竜胆、千振などの薬草を煎じているのです。これらの薬草は、秋が深まると根茎に葉の精が集まると言われています。露を結ぶ頃となった「白露」を薬草の香りで感じ取っています。

コンビニに休む神輿や 鱒雲

中嶋 陽子

この句「鱒雲」の広がりから農村部の「コンビニ」を想像します。秋祭の神輿が駐車場にひと休みです。農村に都市が食い込んである景色と神輿の取り合わせも違和感が無くなりました。

一叢は師の墓にふれ 曼珠沙華

森田 節子

作者は神祇師の墓へ詣でたのです。墓の横には「彼岸花」が群れ咲き、よく見ると花びらが墓石に触れています。まるで師に寄り添っているようです。その姿にしばらく佇んだのです。

月光を鱗のごとく身にまとう

吉田 啓郷

ありあまるほどの月光に佇むと、冷たい光が水のように感じられ、やがて鱗となり身体じゅうを包みだしました。魚になったの

です。作者独特の感覚が作りだした世界です。

二百十日 一升餅の嬰が立つ

奥田 茶々

「二百十日」は「厄日」とも言い、台風などの襲来があり稲などへの被害を恐れます。そのような日に、歩き初めの嬰に「一升餅」を背負わせ丈夫を祈願したのです。嬰は「二百十日」もなんのその、すつくと立ってくれました。目出度しめでたし。

秋澄むや茶笥師の聞く竹の声

岡 尚

「茶笥」は繊細な技術を要すると共に、素材の竹で良し悪しが決まります。秋の張りつめた空気の中で、竹と対話をし、見極めんとしている茶笥師がいます。

秋の灯に影生む子規の手形かな

落合 絹代

子規は三十五歳の若さで九月十九日に亡くなりました。秋の日差しの中を子規庵を訪ねた作者は、しみじみと「子規の手形」を見つめるのです。俳句を、短歌を、評論を書いて書きまくった子規の手です。「影生む」に子規への想いが込められています。

音のなき靴踏みしむる白露かな

雨宮 桂子

「白露」は九月八日あたり、涼しきで露を結ぶ頃です。しかしその露を踏みしめて来る靴に音はありません。それはあの世からの使者だからです。作者の心はその魂と自在に交感するのです。

〈以下略〉

# 風土集



## 南うみを選

身離れのよき魚焼いて秋はじめ  
横浜 赤石 梨花

草根を煮る香ただよふ白露かな  
野分あと人群れやすく去りやすく

鉦叩歳時記開く人に澄む  
無農薬農の記を読む良夜かな

鶴亀の菓子の木型や小鳥来る  
川崎 森田 節子  
日のとどく子規の机や秋団扇

秋桜墓誌に加へる白き文字  
一叢は師の墓にふれ曼珠沙華

祭壇の師にコーヒーを秋の行く  
右端の席は師の席夕月夜  
東京 奥田 茶々

師の声のかすかに聞こゆ鉦叩  
二百十日一升餅の嬰が立つ

鍵穴に鍵のささらぬ厄日かな  
六文銭掲げる里や曼珠沙華

巖生老俳会

師の遺品ひとつひとつの秋の声

秋の灯に影生む子規の手形かな  
忌を修す根岸や子規の歳旦帖

話し声止むとすかさず鉦叩  
山気澄み水澄む里の曼珠沙華

りんご齧る青空の音確かめつ  
秋 天へ俯瞰 三百六十度  
焼津 赤堀美恵子

秋声や書簡に滲む龍馬像  
語らひの行つたり来たり酔芙蓉

セピア色の家族写真や栗御飯  
萩の道風の道へと咲き続く  
京都 杉本葉王子

秋風や松の亀甲やや斜め  
またの世も会ひたきものを吾亦紅

靴磨く妻ありがたし暮の秋

大和 落合 絹代